



## ストックホルムセンタ だより 第5号

### 1. センターの行事・関連イベント

#### 10月13日(水)「第4回サイエンスフォーラム」を開催

10月13日(水)、カロリンスカ研究所のノーベルフォーラムにおいて、第4回サイエンスフォーラムを開催しました。このサイエンスフォーラムは、2001年の開設以来、当センターの活動の核として毎年秋に行っているもので、日本のトップレベルの研究を当地に広く周知するとともに、当地の先進的な研究動向を探ることを目的としています。ライフサイエンスの分野は、日本同様、スウェーデンにおいても政府の重点項目の一つとされており、両国にとって最も関心の高い分野の一つであり、昨年からの第3回から、「Frontiers in Life Science」というサブタイトルをつけて開催しています。

岡崎センター長の冒頭の挨拶に続き、共催機関であるカロリンスカ研究所 Coordinator KI-Japan Cooperation の Maria Wastfelt 博士から、同研究所と日本との学術交流についての事例の紹介も含めた挨拶がありました。続いて本会東京本部の古川祐子国際事業部長から、「Recent Developments at JSPS」のタイトルにより、JSPSにおける最新の動向についてのパワーポイントを用いたプレゼンテーションを行いました。また、午前のセッションには、大塚清一郎在スウェーデン特命全権大使も出席されました。

各セッションにおいては、日本側とスウェーデン側双方から同分野の研究についての発表がありました。発表のテーマ及び講師は、以下のとおりです。

- (1)免疫学  
本庶佑先生(京都大学)  
Hans-Gustaf Ljunggren 先生(カロリンスカ研究所)
- (2)自然免疫  
審良静男先生(大阪大学)  
Ylva Engstrom 先生(ストックホルム大学)
- (3)ゲノム学  
清水信義先生(慶応義塾大学)  
Christer Betsholtz 先生(カロリンスカ研究所)
- (4)神経発生学  
藤澤肇先生(名古屋大学)  
Johan Ericson 先生(カロリンスカ研究所)



(熱気に包まれたノーベルフォーラム)

日瑞で世界に誇る最先端の研究をしていらっしゃる各先生の発表の後には、次々と質問が飛び交い、コーヒブレイクやランチタイムにおいても、講師の先生方を取り囲んでの熱心な議論が繰り広げられました。

また、当日の夜は、講師の先生方を囲んでの夕食会を開催し、非常にリラックスした中で参加者の懇親を深めました。

今後も、このサイエンスフォーラムを中心に、コロキウム、同窓会活動の支援等、様々な観点からセンターの活動を繰り広げていきたいと考えております。  
(水田)



(ノーベルフォーラムにて:左から古川国際事業部長、審良先生、岡崎センタ-長、清水先生、藤澤先生ご夫妻、本庶先生)

## 10月28日(木) JSPS Alumni Club in Sweden 第2回同窓会幹事会の開催



暫定役員と当センタースタッフ  
(下段左、岡崎センター長、右、暫定 Chair の Dr. Ma Li Svensson 氏)

げられ何点か修正があったものの、ほぼ原案どおり合意されました。

続いて、活動対象国について意見交換をし、将来的には北欧各国の同窓会設立を支援し、北欧地域全体の会合まで発展させる方向性について合意がありました。その後、Vice Chairperson の選出を行い、カロリンスカ研究所の Assoc. Prof. Carlos A Rubio 氏が選出されました。続いて、次回総会の開催日、議題、セミナー内容について意見交換を行い、最後に、同窓会運営のその他関連事項として、将来のセミナーの内容等について話し合い、下記の事項について合意がありました。

引き続き 12 時 15 分より出席者 6 名と昼食を共にし、和やかな雰囲気の中、両国の高等教育等について情報交換・意見交換を行いました。

10月28日(木)10:00より、当センター建物内の The Aquarium conference room にて第2回同窓会幹事会を開催しました。今回の開催は、本年5月17日に開催した第1回の同窓会幹事会において暫定役員8名の選出後の活動の進捗状況について事務局から報告すると共に、1)会則の内容、2)暫定 Vice Chairperson の選出、3)次回総会等について意見交換を行う目的で開催し、暫定役員8名中6名が出席しました。

当日は、暫定 Chair の Dr. Ma Li Svensson 氏が司会進行役を務め、冒頭の挨拶後、岡崎センター長からの挨拶、参加者の自己紹介、続いて水田事務官より第1回幹事会の結果を踏まえた諸案件の進捗状況(参考)の報告を行いました。その後、議題に入り、会則について活発な議論が繰り広

### 参考 第1回幹事会後の同窓会支援活動の進捗状況

- (1)JSPS (Stockholm Office)のホ - ムペ - ジに「同窓会コーナ」を設置  
8月にリニュー - アルし「同窓会コーナ」を設置し、JSPS Alumni Club in Sweden の概要や暫定役員の紹介、会員からの情報を掲載。
- (2)コンタクトパ - ソンの登録・ホ - ムペ - ジへの掲載  
コンタクトパ - ソン 22名に「Profile format」を照会し、情報を整理後、9月にホ - ムペ - ジへ掲載。
- (3)同窓会独自の「Newsletter」の発行  
9月1日に初刊し、第一回の幹事会の開催報告、暫定 Chairperson の Dr. Ma Li Svensson 氏の紹介、同窓会活動状況等を掲載。
- (4)同窓会会則について  
JSPS 英国の海外研究センターの例を参考に原案を作成。

### 【第2回幹事会の合意事項のポイント】

- (1)同窓会会則について (会則の詳細は省略)  
若干の修正が入ったが、ほぼ原案どおり合意。
- (2)同窓会支援活動の対象国の拡大  
将来的には、活動対象国をスウェ - デンから北欧地域まで発展させていく方向とするが、当面は積極的な元フェロ - が中心的な役割を果たし得る国から、当センター - でも同窓会設立を支援していく。
- (3)暫定 Vice Chairperson の選出  
カロリンスカ研究所の Assoc. Prof. Carlos A Rubio 氏を選出(本人欠席のため意向を確認)
- (4)次回総会について  
・2月11日(金)にストックホルムにて開催し、半日程度(午前中)とする。当日は、総会及び「日本における高等教育について」のセミナー(説明:水田事務官)を行う。  
総会にて各種会員の枠組が決定されることから、今回についてはセミナー - も含めて正会員のみで実施する。
- (5)その他関連事項 < 将来にわたるセミナーの内容>  
次回総会後の第1回セミナー - においては、トピックとして「日本における高等教育について」取り上げるが、第2回目からは同窓会会員に意見聴取を行い、会員の共通して興味のあるテーマやトピックについて、年2、3回程度の頻度でセミナー - を実施する。また瑞日交流を深めることを趣旨とした外部セミナー - (例えば本年4月22日開催の瑞日基金主催の「Meeting Point Japan」)等の情報提供をし、来年以降同窓会会合の同時開催などを検討していく。

今回の幹事会は本年2回目の開催でしたが、新たなメンバ - が加わったものの、メンバ - 同士が打ち解けて率直な意見交換ができたため、同窓会会則、次回総会内容やセミナー - 内容等について様々な前向きな意見交換がなされ、暫定 Vice Chairperson の選出もスムーズに行われ、数多くの事項が合意に至りました。今後は、合意に至った事項と来年2月11日(金)開催予定の次回総会の実施に向けて、引き続き、暫定役員と協力して同窓会を支援していきたいと思っております。(土屋)

## 9月22日(水)ヨ - テボリ大学において JSPS フェロ - シップ説明会開催

9月22日、ヨ - テボリ大学 経済商法学部キャンパスにおいて JSPS フェロ - シップ説明会を開催しました。今回の説明会は、ヨ - テボリ大学、チャルマス工科大学の学生、研究者等を対象に行ったもので、水田事務官から JSPS の概要及び活動について、澤登研修生からフェローシップの概要及び申請手続きについて説明を行いました。当日は 20 名の大学院博士課程の学生や研究者等が参加し、参加者にはストックホルムセンターのブローシャーとプレゼンテーションのコピーを配布しました。説明後フェローシップの審査の際、



特定の分野が有利になることはあるのか、フェロー受入先の日本の大学には特別な要件があるのか、スウェーデンの Nominating Authorities の担当者を教えてほしい等の活発な質疑応答が行われました。(JSPS フェロ - シップ説明会の様子)

今回の説明会は、JSPS のフェローシップに関心をもっている学生・研究者の参加が多く、参加者の聴講姿勢も積極的で、大変やりがいのある説明会となりました。説明終了後の質疑応答では、参加者から具体的な申請方法や審査方法に関する質問が多くされ、応募者が申請するに当たりどのような疑問をもつかが分かり、参考になりました。今後もこのような情報提供の場を設けて、積極的にネットワークを広げていきたいと思えます。(澤登)

## 2. ニュース&トピックス

今月は、トピックスとして、1)2004 年ノーベル賞の発表、2)KVA(スウェーデン王立科学アカデミー)、3)ヨ - テボリ大学における日本語教育の 3 つを、ニュースとして、スウェーデンの若手研究者の研究環境について、大手新聞の「ダーゲンス・ニーヘーテル」の掲載概要を紹介したいと思います。

### 2004 年のノーベル賞発表される

10月4日の生理学・医学賞の発表に始まり、11日の経済学賞の発表まで、ノーベル賞各賞の発表が行われました。各賞の発表日、発表機関、受賞者については下記のとおりです。

発表日	賞名	発表機関	受賞者(国籍)敬称略
10月4日 (月)	生理学・医学賞	カロリンスカ研究所	Richard Axel(米国) Linda B. Buck(米国)
10月5日 (火)	物理学賞	スウェーデン王立科学 アカデミー	David J. Gross(米国) H. David Politzer(米国) Frank Wilczek(米国)
10月6日 (水)	化学賞	スウェーデン王立科学 アカデミー	Aaron Ciechanover(イスラエル) Avram Hershiko(イスラエル) Irwin Rose(米国)
10月7日 (木)	文学賞	スウェーデンアカデミ ー	Elfriede Jelinek(オーストリア)
10月8日 (金)	平和賞	ノルウェー・ ノーベル委員会	Wandari Maathai(ケニア)
10月11 日 (月)	経済学賞	スウェーデン王立科学 アカデミー	Finn E. Kydland(ノルウェー) Edward C. Prescott(米国)

(若干の感想)

昨年と今年、2年続けてストックホルムで行われた発表に同席する機会を得た筆者は、これだけ世界の注目を集める学術賞の発表であるにもかかわらず、そのオープンでリラックスした発表会場の雰囲気、一種のスウェーデンらしさのようなものを感じました。

カロリンスカ研究所とスウェーデン王立科学アカデミーで行われた発表を例にしますと、発表の流れとしては、まず、定刻になると事務総長、選考委員長及び委員数人が入室して中央に着席します。続いて、事務総長から出席者を簡単に紹介した後、受賞者を発表します。王立科学アカデミーでの発表では、最初のスウェーデン語による発表と同時に会場のスクリーンに受賞者の顔写真と所属名が映

し出されます。授賞者名が発表された瞬間も、どよめき一つ起こらず、淡々と発表が続けられます。続いて、5～10分の授賞理由の説明（王立科学アカデミーでは引き続き英語の1～2分の概要もあり）、そして最後に質疑応答です。

実際の雰囲気についてですが、例えば、カロリンスカ研究所の場合は、発表会場である「ノーベルフォーラム」が同大学の敷地内にあるため、会場には多くの学生も押し寄せ、100名少々の座席は発表15分前に到着しても完全に埋め尽くされていました。入場に当たってのチェックは一切なく、発表後は会場のどこからの質問も広く受け付けていますので、著名人の講演に大勢が詰め掛けているような熱気に包まれた雰囲気が特徴です。



王立科学アカデミーにおけるノーベル化学賞の発表（2004年10月6日）

スウェーデン王立科学アカデミーも、入場に当たってのチェックはありません。会場が大学の敷地内ではないことも影響してか、こちらはジャーナリストの割合が大きく感じます。アカデミーの会員の方々も一角を占めています。会場自体は、同アカデミーの歴代会員達の肖像画に囲まれた格式ある部屋で、座席の並べ方も記者会見的な雰囲気が強くなっていますが、今年は昨年から2点異なった点がありました。一つは、受賞者の1人と電話をつなぎ、記者から質問ができるようにアレンジされていたことです。もう一つは、物理学賞と化学賞の発表で授賞理由をスライドで解説する際に、職員による、ちょっとしたパフォーマンスが用意されていたことです。物理学賞の発表では、粒子間に働く力について説明する際、2名の職員が長いリボンを持って発表者の机の前に登場し、両サイドを引っ張ったり離れたたりするところを実演するのですが、コメディアンのようなおどけた仕草も交えて会場の笑いを誘っていました。化学賞の発表では、たんぱく質の分解の説明に当たり、事務総長自らが携帯式のシュレッダーで紙を細長く切るところを実演し、会場を和ませていました。いずれも、素人には難解な自然科学の授賞内容について、リラックスした雰囲気の中で聴衆にわかりやすく説明する努力をしている姿勢が見られました。

これらは、授賞内容の本質的な点ではありませんが、発表を伝える新聞等からは日本になかなか伝わりにくい現地の発表シーンを少しでも感じ取っていただければ幸いです。（水田）

ノーベル賞の発表に引き続き、ノーベル物理学賞・化学賞の選考機関であるKVA（スウェーデン王立科学アカデミー）について紹介したいと思います。

### スウェーデン王立科学アカデミー(KVA)



（スウェーデン王立科学アカデミー）

スウェーデン王立科学アカデミー(KVA)は、1739年に世界的に有名な植物分類学者のカール・リンネほか6人により設立された独立の非政府機関です。

組織体制は、現在、グンナー・エクイスト事務総長ほか、非常勤の会長、副会長(3人)のもとで、約30人のスタッフが勤務しています。メンバーは、約350人のスウェーデン人会員(うち167名は65歳以下)及び167人の外国人会員から構成されており、各々、10部門(数学、天文学及び宇宙科学、物理学、化学、地球科学、生物学、医学、工学、経済学及び社会科学、人文学)に所属しています。

この内、日本人会員は、長倉三郎日本学士院院長、伊藤正男理化学研究所脳科学総合センター特別顧問、杉村隆国立がんセンター名誉総長、吉川弘之産業技術総合研究所理事長、笠木伸英東京大学工学部教授の5名です。

主な活動は、科学全般、特に自然科学と数学の向上を図るための各種事業の実施、隔週水曜日の定期会合、クリスティンベリ海洋研究所、アビスコ科学研究所など7つ研究環境の提供、博士課程学生等、若手研究者対象のグラント・奨学金の提供、ノーベル賞ほか20種類以上の賞の設置、

科学知識の増進のための天文台や博物館での展示会の実施、最新の科学成果・科学倫理等の質問に答えるリーフレットの作成、学校における科学教育の向上のため、優れた教師や図書館への賞の授与などです。その他KVAは、国際協力支援として、ICSUなどの数多くの国際科学学会の支援ほか、リサーチカウンシル等多くの世界のアカデミーと相互補完的な連携を強化し、各々の活動に積極的に参画すると共に、地球環境問題など世界的に問題となっている共通の課題に対して協同で解決に取り組んでいます。

ノーベル賞との関係では、1895年にはアルフレッド・ノーベルの遺言により、「物理学賞及び化学

賞」の選考機関となり、1901年から授与を開始し、2001年に100周年を迎えています。ノーベル賞受賞者の最終決定は、物理学賞はアカデミーの物理部門(39人)が、化学賞は同化学部門(36名)が行っており、実際の選考は、各賞各々5人から構成されるノーベル委員会が実施しています。選考過程は、授賞前年の9月に北欧及び世界各国の研究機関、研究者に推薦を依頼することから始まり、翌年10月初旬(2004年は物理学賞10月5日、化学賞同6日)に受賞者の発表があります。授賞式は、毎年ノーベルの命日である12月10日にコンサトホルで行われ、受賞者への賞金は1000万クローナ(約1億5000万円)になっています。この他、1968年からは、スウェーデン銀行300周年記念で設立された「ノーベル記念経済学賞」も当アカデミーが授与機関となっており、選考過程、賞金額などは同様に行なわれています。

日本との関係は緊密な関係にあり、特にJSPSとは、1982年に、研究者交流のための2カ国間協定を締結して以来20年以上に渡り交流を継続しています。同研究者交流の募集枠は、スウェーデンから日本は、長・短期の合計で20人・月、日本からスウェーデンは、長期約2名、短期約3名です。さらに、フェロシップ事業の推薦機関として「外国人特別研究員(一般)」及び平成15年度新設の「外国人特別研究員(欧米・短期)」の推薦業務を行うなど、両国の研究者交流における重要な一翼を担っています。

(水田・土屋)

### ヨ - テボリ大学における日本語教育について

9月22日に行ったヨーテボリ大学におけるJSPSフェロシップ説明会終了後、ヨーテボリ大学経済商法学部のClaes Goran Alvstam教授(国際関係担当副学部長)、ヨーテボリ大学経済商法学部国際コーディネーターのKarin Cederholm氏、井上智愛氏、ヨーテボリ大学文学部東洋・アフリカ言語学科日本語専攻のSatoko Berger教授、Noriko Thunman教授からヨーテボリ大学の日本語教育及び同大学と日本の大学との交流についてお話を伺うことができました。

ヨ - テボリ大学では、経済商法学部国際ビジネス学科日本語専攻と文学部東洋・アフリカ言語学科日本語専攻で日本語を学ぶことができます。国際ビジネス学科では、最初の4学期(2年間)で全生徒が経済、経営学を学んだあと、言語か方法論の専門科目を選択します。言語の選択肢は、ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、日本語の5言語あり、中国語又は日本語を履修した生徒は、言語体系が他のヨ - ロッパ言語と大きく異なり修得に一定の期間を要することから、他の生徒より1年在学期間が長くなりそれぞれの言語と文化を学ぶことになります。現在日本語専攻では毎年15人の学生が入学してくるそうです。文学部東洋・アフリカ言語学科では、アフリカ言語、アラビア語、ヘブライ語、中国語、日本語を専攻することができます。日本語専攻では毎年50人の学生が入学し、2年半かけて日本の言語、日本事情、論文の書き方等について学びます。1992年に大学院が開設され、現在4名が学んでいます。

2つの学科には、共通の科目もありますが、国際ビジネス学科ではビジネスの場で活用できる実践的なコミュニケーションを重視した授業、東洋・アフリカ言語学科では、研究者養成のための漢字や読み書き中心とした授業を行っています。ヨ - テボリ大学では、日本の10大学(同志社大学、北海道大学、北海道東海大学、慶應義塾大学、神戸大学、大阪経済大学、大阪府立大学、静岡大学、早稲田大学、東京学芸大学)と協定を結んでおり、ほとんどの学生が在学中に日本へ留学します。日本の大学からの留学生は、英語力の問題もあり、同大学から日本への留学生ほど多くなく、スウェーデンに来ている他国からの留学生と比べて生活面で大学側のサポートを要求する学生が多いとのことでした。一方、スウェーデン人が日本に留学すると、大学や学生寮での規制にカルチャーショックを受けるため、事前のガイダンスの必要性を感じているとのことでした。

英国、ドイツでは日本語学科の廃止が進んでいる中、スウェーデンでは2、3年前から日本語専攻の志望者が増加しているそうです。これは、日本の漫画、アニメ、コンピュータ・ゲームの影響によるものが大きく、昔は人と違ったことをやりたい、新しい挑戦を試みたいとの動機で日本語を勉強する生徒が多かったそうですが、最近は日本の現代文化に興味を持っている生徒が多いようです。言語に限らず、スウェーデンでは現在日本食が流行しており、あらゆるところで日本食レストランを見かけます。この現象が一時的なものなのかは分かりませんが、日本の現代文化がもたらす影響は大きいようです。(澤登)

### スウェーデンは全世代の研究者を喪失？

スウェーデンは、GDPに占める研究開発費の割合が4.3%(2001年)とOECD諸国の中で最高であるほか、国の研究開発投資も上位に位置するなど、研究環境としては比較的恵まれているようなイメー

ジを抱きがちです。その一方で、世界でも有数の医科大学であるカロリンスカ研究所の 13 人の若手研究者グループによる、若手研究者の研究環境について政府に改善を求める趣旨の投稿が、先日、大手の新聞である「ダーゲンス・ニーヘテル」に掲載されましたので、その概要を紹介したいと思います。(水田)

### (投稿の概要)

「ポスドク(博士研究員)」は、若手研究者が以後独立していくために最も重要なキャリアであるが、資金不足から十分な研究ができないため、ポスドク後に研究助成機関からの限られた研究費を獲得するのに必要な独立性を示すことが困難となるという悪循環に陥っている。

「助手(Research Assistant)」は、4年間のフルタイムポストで研究費もあるが、ポスト獲得のためには非常に厳しい競争がある。時間の制限なく研究活動ができる正規のポストは、「講師(Lecturer)」と「教授(Professor)」のみであるが、これらのフルタイムポストを獲得できるのは平均 50 歳である。「ドーセント」は、給与を他の企業等から受け取っているため雇用者とは言えない。

1990 年代後半に、教授数が急激に増加している一方、同じ割合で講師数が激減している。これは、政府が「教授」をポストではなく資格としたためである。そのため、多くの講師が採用と同時に又は数年内に教授となったが、たいてい給料の引き上げを伴うため、給料が教授分へと流れた。現在は、講師のポストは募集がなく、助手のポストも 1995 年以来激減している状況である。その一方で、博士課程の学生は急増している。すなわち、雇用構造の変更で、助手ポストの入口が極めて狭く明らかな「ボトルネック」となる現在の奇妙なポスト配分を生み出した。博士課程の学生のうち、政府からの資金を得ていすのはわずか 20 パーセント以下で、残りの学生は外部資金を得ていることにも注目いただきたい。

カロリンスカ研究所では、1995 年以降、「研究者(Researcher)」と呼ばれる雇用形態が急増した。彼らは、多くの場合、著名な研究者が獲得した外部資金により毎年の契約で雇用されている。この「研究者」というタイトルについては大学関係法令に規定がなく、競争もほとんどない。若手研究者に対する、広い公募形式のよく構成されたポスト及び グラントの不足が、スウェーデンの研究の革新・創造を行き詰まらせている。

現在、多くの博士課程の学生が、研究の道をあきらめて就職することを余儀なくされている。家族を持つために安定した収入が必要となる時期であることもある。研究を続けることができるのは裕福な博士課程の学生のみではないだろうか? 政府がこの現状を放置した場合には、スウェーデンは未来のリーダーである若手研究者のみならず全世代の研究者を喪失(海外又は他の職種へ)し、スウェーデンの大学教育、研究開発は壊滅状態になるであろう。

スウェーデンは基礎研究への予算の大幅な増加が必要であり、それにより若手研究者の独立が可能となる。政府出資の助手ポスト、すなわちリサーチカウンシルによる通常の適正テストを通じて任命される形の助手ポストを大幅に増加する必要がある。

(Dagens Nyheter 9月12日4面(ディベート))

## 3. JSPS Alumni Club in Sweden 同窓会暫定役員へのインタビュー特集

センターだより第4号に引き続き、JSPS Alumni Club in Sweden 同窓会暫定役員へのインタビューの後半を特集します。

(土屋)

### 8月18日(水)第5回 JSPS Alumni Club in Sweden 同窓会暫定役員への インタビュー

第5回目は、8月18日(水)午前11時より、ルンド大学水質資源工学部の研究室において、同大学教授で、JSPS 事業で十数年の長期に渡る研究歴がある同窓



#### ~インタビュー者の紹介~

Magnus P LARSON 氏 (1958年8月12日生、スウェーデン人)  
ルンド大学・水質資源工学部、教授

- 1)研究分野: 海岸工学・流体力学
- 2)博士の学位: 1988年5月15日、ルンド大学で「工学」の博士号取得。
- 3)JSPS 事業での渡日経験

#### フェロ-シップ事業

1994年に、外国人特別研究員(一般)事業を通じ、東京大学沿岸環境研究所で、受入研究者の磯部雅彦先生と「海岸工学」の共同研究を実施。フェロー期間、約2年間。

KVA(スウェーデン王立科学アカデミー)との二国間学術交流事業。1988年~2004年にかけて4回利用。研究期間は各8か月。



(ルンド大学工学部を示すインタビュー者の Magnus P LARSON 氏)

会暫定役員の Magnus P LARSON 氏をインタビューしました。

インタビュー者の Magnus P LARSON 氏は、相撲、柔道、演歌好きで茶道や琴、日本庭園、お寺など伝統文化ほか、日本のあらゆる分野に関心を持ち、研究のかたわら日本語を勉強し、日本への理解に対する努力を惜しまない親日家でした。同氏は、インタビューの数日前に JSPS 二国間学術交流事業を終えて帰国したばかりで、日本とは 1988～2004 年の長期に渡る研究を実施されており、理由として、同氏の研究テーマの「沿岸環境問題」に対しての豊富なノウハウと充実した研究施設があることを挙げられました。

Magnus P LARSON 氏の日本との共同研究のきっかけは、1987 年、同氏がポスドクの時に、アメリカのニューオーリンズで開催された「沿岸堆積学会」での砂村継夫先生との出会いでした。同先生から JSPS の二国間学術交流事業の紹介があり、1988 年に 5 ヶ月ほど筑波大学で共同研究を実施している間に知り合った磯部雅彦先生（東京大学）と、JSPS フェロ-シップ事業等で 1991 年から現在に至るまで共同研究を実施されています。

1994 年度の JSPS フェロ-シップ(外国人特別研究員)事業の成果として、同氏は 1)約 2 年の長期に渡る研究と科学研究費補助金による研究設備への投資により、共同研究の進展が顕著にみられたこと、2)神戸での海岸工学学会、札幌での学会発表、数多くのワークショップなどを通じ、多くの日本人研究者やポスドクの学生と意見交換を通じ、瑞日交流を深めることができ、将来の共同研究につながる人的・研究ネットワークの構築ができたことを挙げられました。

同氏は、JSPS 事業終了後も、共著論文も執筆するなど、引き続き受入研究者ほか、佐藤慎司先生(東京大学)、砂村継夫先生(大阪大学)、柴山知也先生(横浜国立大学)など数多くの日本人研究協力者と交流を深めており、今年 9 月末にリスボンで開催される「海岸工学学会」で、磯部先生ほか日本人研究者と意見交換をする予定であるとおっしゃりました。

JSPS 事業については、二国間学術交流・フェロ-シップ事業双方とも瑞日の共同研究の促進や研究者交流の活性化につながるすばらしい事業であると評価した上で、フェロ-シップの外国人特別研究員事業に対する要望として、科学研究費補助金の件で、現行の制度では、滞在期間が 23 ヶ月以下の場合、補助金が一年度分の金額しか申請できなく、一時出国で 24 ヶ月滞在ができない場合には補助金の支給に差が生じ不利であるとの理由から、制度の柔軟化を求められました。また、二国間学術交流事業に対する要望として、宿泊手当の充実を期待されていました。

さらに、長期に渡る日本での研究歴がある同氏は、瑞日の研究環境を比較し、日本の研究環境のメリットとして、実験設備など研究設備面や専門分野の図書の実質を挙げられました。また、スウェーデンとの違いとして 1)日本では、研究者同士がお互いに評価するピアレビューのシステムがない点、2)研究室中での指導教官と学生、研究スタッフとの関係が密で、研究討論を重ねることで、学生の研究意欲の促進、研究室の活性化につながっている点、3)教官の指導のもとで学生が研究できる環境がある点を挙げられました。対してスウェーデンでは、研究面での財政投資不足から、研究分野により多少違いがあるものの、十分な研究環境が整備されていない点が問題であると指摘され、日本との違いとして、1)教官と学生が密にコミュニケーションをとる機会は少なく、教官が学生を指導することはなく、独自で研究を行っている点、2)研究者間のピアレビューが頻繁に行なわれるため、教官は論文を数多く執筆し、研究業績をあげるプレッシャーが常にあり、教員の質の向上が図られる反面、失業の不安を抱え、安定した研究環境でないとおっしゃりました。

また、両国の大学教育については、日本は、教育面での投資が当地に比べて低く、学習能力が低い学生や社会人入学に対する支援制度が十分でない指摘されました。対して、スウェーデンでは、政府が教育への財政投資に重点をおき、教育の機会均等のもと、国の低利率の「学生ローン制度」で経済的背景を抜きにしてすべての国民に大学進学への道が開かれている点を評価し、さらに、当地では、学生の年齢層も幅広く、社会に出てから再び大学進学を希望する社会人に対して、「教育休暇制度」があるなど、仕事を中断せずに、職業生活と両立して学習できるバックアップ体制が整備されており、生涯学習社会が進んでいるとおっしゃいました。

同窓会支援活動については、今後の活動に対する要望として、ポスドクレベルの若手研究者の場合、日本での研究に興味をもっているにもかかわらず、人的・研究者間ネットワークがない場合、受入研究者を自力で見つけるのに苦労するため、JSPS 側でも同窓会支援活動を通じて情報提供を行い、若手研究者の受入研究者探しのサポートを期待されていました。(土屋)



(リンシェーピン大学・科学技術研究所を示す Ma Li SVENSSON 氏)



~インタビュー者の紹介~  
(中国出身、国籍:スウェーデン)  
リンシェーピン大学科学技術研究所・助教授

- 1) 研究分野: 数学  
最近の研究 - マ:「歴史、教育、多種文化、ジェンダーの観点からみた数学的方法の比較論」
- 2) 博士の学位:  
1994年、チャルマース工科大学で「数学」の博士取得。
- 3) JSPS 事業での渡日経験  
・ KVA(スウェーデン王立工科アカデミー)との二国間学術交流事業を 1999~2002 年にかけて3回利用。フェロー期間、各3カ月間。
- 4) 主な受賞  
・ スウェーデン王立科学アカデミー(1995、1996年)  
・ ロンドン王立学会(1993、1995年)、キャンノン財団(1994年)ほか

最終回となる第6回目は、9月1日(水)16時より、リンシェーピン大学・科学技術研究所の研究室において、同大学の助教授で同窓会暫定チェア・パ・ソンである Ma Li SVENSSON 氏をインタビューしました。

同氏は中国の出身で、1988年に渡欧し 1994年にチャルマース工科大学で「数学」の博士号取得後、渡日し、1996年まで矢野先生(京都大学)と共同研究を実施しました。その後、マサチューセッツ工科大学で知り合った大笹先生(北海道大学)から JSPS の二国間学術交流事業の紹介があり、1999年~2002年にかけて同氏ほか、橋本先生(北海道産業大学)、竹田先生(京都大学)と各3ヶ月間の共同研究を実施、講演発表などを含めてこれまで6回ほど渡日されています。



(日本人の友人の家に招待され、得意の手作り餃子を披露している中国出身の Ma Li SVENSSON 氏)

Ma Li SVENSSON 氏は、1993年古都京都での講演来日きっかけに、日本に関心を持ち始め、現在、日本の政治ほか、茶道、着物などの日本の伝統文化、日本語、日本食、日本人、スポーツ(特に相撲)などあらゆる分野に関心をお持ちです。食事は、日本食が一番



(京都で迎えた新年、この着物をきて初詣にでかけた時、懐かしそうに写真をみせてくれました)

美味しいとおっしゃり、特に、お寿司、すき焼き、湯豆腐、味噌汁、日本茶好みであると語られました。また、日本語については、他の言語と比較し「Peaceful」であるとおっしゃり、例として、「ありがとうございます、いただきます、ただいま、いってらっしゃい」など、日本人が日常生活でなにげなく使用している言葉のひとつひとつに美しさや思いやり、丁寧さがあると語られました。同氏は、マサチューセッツ工科大学での日本語学習以外に、渡日を契機に知り合った数多くの日本人研究者や友人との交流を通じて、日本語を勉強し、日本や日本文化に対する理解を一層深めているとのこと、同氏の話から日本をこよなく愛している様子が伺えました。

当初数学・数理解析を専門分野にしていた Ma Li SVENSSON 氏は、次第に数学の文化的、ヒューマニスティックな側面に関心を持ち、数年前に、リンシェーピン大学のジェンダープロジェクトリーダーに選ばれました。近年は、「歴史、教育、多種文化、ジェンダーの観点からみた数学的方法の比較論」を研究されており、講演の依頼で日本のほか米国、英国、オランダ、デンマーク、中国、台湾、そしてこの夏、チェコのプラハでジェンダー観点からの捉えた数学論を講演するなど、世界各地の大学で講演活動を広く行い、多くの研究者と交流を深められています。



(Euro Science Open Forum の Mobility シンポジウムで講演する Ma Li SVENSSON 氏)

また、同氏は、今年の8月25日(水)~28日(土)の4日間にわたり、ストックホルムの Stockholm City Conference Center で開催された「第一回 Euro Science Open Forum」(センターだより第4号に掲載)の「Mobility beyond Europe: Mobility seen in a global context」のシンポジウムで、渡日経験による研究成果や、日本とスウェーデンとの文化の違いなどについて講演を行い聴衆を惹きつけました。その後、JSPS ブースに訪され、特にフェロシップ招へい(長期)事業に関心をお持ちになった様子でした。

同氏は、JSPS の二国間学術交流事業の成果として、1)共同研究の推進、2)瑞日の研究者交流を通じた日本への理解の深まり、3)「北欧史研究 BALTO-SCANDIA」ほか数多くの論文の執筆を挙げられました。当事業に対する要望としては、同氏は、現在、ポストドクレベルの「外国人特別研究員事業」のみ認めている「日本語研修」費用の補助を、シニア対象の JSPS 事業にも拡大して欲しいとおっしゃりました。

さらに、同窓会支援活動については、活動を促進する上で、会員の多くが興味をもっているテーマやトピックにおいて、日本人講師を招いてプレゼンテーションを行うなど、日本での研究に関心のある研究者に有益な情報を提供することが大切であると語られました。(土屋)

### ~同窓会会員へのインタビューのまとめ~

今回で、7月から実施してきた暫定役員ほか同窓会会員のインタビューを終了いたしますが、インタビューを通じ、フェロ-シップを中心とする JSPS 事業内容・制度面の充実度や改善点ほか、瑞日の研究環境の違い、両国の大学教育の比較や考察を行う大変よい機会となりました。

全体を通じて、JSPS 事業の普及については、当地では、KVA(スウェーデン王立科学アカデミー)との二国間学術交流事業についての認知度が高いのに対して、フェロ-シップ事業の普及度は十分でなく、今後も引き続き普及活動を積極的に行い、併せて当センターのプレゼンスを高めていく必要性を感じました。

また、JSPS フェロ-シップ事業、二国間学術交流事業内容の満足度については、インタビュー者6名全員が「期待どおりの成果が達成された」と感謝されており、具体的には 1)瑞日の共同研究の進展、2)研究者交流の活性化、3)将来の共同研究につながる瑞日の人的・研究者間ネットワークの構築・拡大、4)学生の研究意欲の促進、研究室の活性化につながるすばらしい事業であると評価されています。今後は、1)外国人招へい事業(長期)については、「分割滞在」の許可、滞在費などの支給経費の充実、「日本語研修」費用の補助などの制度の拡充、2)外国人特別研究員事業については、科学研究費補助金制度の柔軟化、3)KVA(王立科学アカデミー)との二国間学術交流事業については、宿泊手当の充実などの要望を十分に踏まえて、JSPS 事業全体の改善につなげていくことが重要であると思います。

さらに、同窓会支援活動については、インタビュー者の多くが当センターに対して「瑞日の共同研究の促進につながる活動」を期待しており、今後は8月にリニューアルした当センターホームページ「同窓会コーナ」において、コンタクトパーソンの情報や、会員からの情報を充実させていくと共に、「Newsletter」(初刊9月)で、渡日経験者の日本での研究成果を広く公開する等、両国の交流の活性化につながるよう、活動を充実させていきたいと思っております。(土屋)

### 【編集後記】

今月はノーベル賞の発表に始まり、第4回サイエンスフォーラム、第2回同窓会幹事会開催など行事の多い月でしたが、無事に終了し、スタッフ一同ほっとしております。

北欧は秋の訪れが早く、ストックホルムでも10月上旬には一斉に木の葉が紅葉で色づき、日が暮れるのが日毎に早くなってきました。ストックホルムでの研修生活も後半になりましたが、引き続き、瑞日の学術・研究者交流が活発となるようにセンター活動を充実させていきたいと思っております。

(土屋)

監 修: 岡崎 恒子 (ストックホルム研究連絡センター - 長 E-mail: [t-okazaki@jgps-sto.com](mailto:t-okazaki@jgps-sto.com))

編 集 長: 水田 功 (ストックホルム研究連絡センター - 事務官 E-mail: [i-mizuta@jgps-sto.com](mailto:i-mizuta@jgps-sto.com))

編集担当: 土屋 友紀 (研修生 E-mail: [gakushin3@jgps-sto.com](mailto:gakushin3@jgps-sto.com))

執 筆: 水田 功、土屋 友紀、澤登 ゆり子 (研修生 E-mail: [gakushin2@jgps-sto.com](mailto:gakushin2@jgps-sto.com))

JSPS Stockholm office, Fogdevreten 2, S-171-77 Stockholm, Sweden

TEL +46 08 5088 4561 FAX +46 (0)8 31 38 86 <http://www.jgps-sto.com>